

ラオス国 医療援助活動に参加して

琉球大学 医学部 医学科 4年次

074143E 島村有希子

今回、琉球大学歯科口腔外科が毎年行っている「ラオス国 口唇口蓋裂患者に対する医療援助活動」に参加させていただいてから早くもひと月が過ぎようとしています。そこで体験はすごく印象的で、ごく最近のことのように思われます。

一番印象的だったのは、手術前と手術後の患者さんとその家族の表情の変化です。問診を受けに来ていた時や手術直前には、とても不安そうな表情や無表情の方がたくさんでしたが、手術を終え翌日に消毒をする頃には感謝の言葉とともに笑顔を見せてくれ、どこか安心したような表情をしていました。特に小さい赤ちゃんのお母さんは、手術前に泣いているわが子を抱きしめながら一緒に涙を流して、見ているこちら心も締め付けられる程でしたが、その分、手術を終えて再会した時の安堵の表情や、医療スタッフの方に「ありがとう」と感謝している姿は見ていてとても胸が熱くなりました。

ラオスに行く前に砂川先生がおっしゃっていたように、ラオスでのこの医療活動で“医療の原点”を知ることができたような気がしました。手術を終えた患者さんの喜びや安堵の表情、患者さんの言う「ありがとう」のその一言で、何もしていない私まで嬉しくなり、疲れを忘れました。そして、やはり医療に携わる仕事を目指してよかった、こんなふうな医療人になりたいと強く感じました。周産期医療や生命の維持に関わるような医療が重視されている発展途上国であるラオスにおいては、口唇裂・口蓋裂という病気は死に直結する可能性は低くその手術も緊急を要するものではないかもしれませんが、見た目が他の人とは違うということはいじめや嫌がらせなど、嫌な思いをする患者さんもいたと思います。手術をすることで、そういった患者さんの悩みが少しでも軽減したり、前よりも人生を快適に過ごすことができるのならそれはすごく意義のあることだと思いました。肉体的にではなくとも精神的な部分でその人を救っているからです。

また、ラオスでは人と人とのつながりの大切さを改めて知ることができました。日本とは違ってラオスでは医療者と患者さんの距離が近いような気がしたからです。患者さんの話をきちんと聞く、親身になる、そういった何気ない当たり前のコミュニケーションかもしれませんが、そういうもので医療者と患者さんの関係はすごく変わるのではないかと思います。先ほどの“医療の原点”とつながりますが、患者さんとの関係が良ければ、相手からの感謝の気持ちも伝わりやすく、そうするとこちらもさらに頑張ろうと思える、と、いい事の繰り返しのようになります。このような医療人 - 患者関係が日本でもあれば、医療問題や訴訟問題も軽減するのではないかと感じました。

今回、このようなプロジェクトに参加させていただき、貴重な体験をしたことは私にとってとても大きな財産になったと思います。佐藤医学部長、砂川先生をはじめとする歯科口腔外科の方々、関係者の方々には本当に感謝しています。ありがとうございました。残

りの学生生活も勉強はもちろんですが、いろいろな体験をして人間としても成長できるように頑張っていきたいと思います。